

# TRANS

「『翻訳』の諸相」研究会 Newsletter No.17

2005/11/17

## 活動状況

- ◆ 第一研究班が、以下の要領で、第 17 回研究会を開きました。

日 時： 2005 年 9 月 17 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 三浦笙子（東京海洋大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 7 歌第 16 連から第 55 連まで」

参加者： 秋草俊一郎、芦本 滋、鈴木 聡、中田晶子、三浦笙子、皆尾麻弥、若島 正（以上7名）

- ◆ 第二研究班の第9回研究会「越境する文化2」が、以下の要領で開かれました。

日 時： 2005 年 9 月 20 日（火） 午後 2 時より

場 所： 京都大会文学部新館 8 階 仏文共同研究室

発 表： 中村 翠 （京都大学大学院博士後期課程）「イギリスにおけるゾラの受容」

吉川順子 （京都大学大学院博士後期課程）「フランスにおける極東詩の受容—高踏派詩人と

中国詩」

司 会： 永盛克也 （京都大学）

上記の研究会の発表要旨を、エッセイの後に掲載しています。

## 「参考書」としての翻案—*Lolita : A Screenplay* (1974)

中田晶子

ウラジーミル・ナボコフは、死後に出版された『魅惑者』(1986)を除いた自作のロシア語長篇小説すべての英訳にたずさわり、英語長篇小説『ロリータ』(1955, 58)をロシア語に訳している。作者自身による翻訳においては原典からの変更も自由であるため、ナボコフ小説のロシア語版と英語版では時にかなりの差異が見られる<sup>i</sup>。

TRANS 13号で佐々木徹先生が論じておられたように、小説の映画化も一種の翻訳である。ナボコフがスタンリー・キューブリックの映画(1962)<sup>ii</sup>のために書いた『ロリータ』のシナリオも原作者による自由な翻訳であり、当然のことではあるが小説との差異を含んでいる。出版されたシナリオを見ると、映画のために新しく作られた場面には映画的魅力を感じさせるものも多い。火事で焼け落ちた家を案内するマクー氏(エイドリアン・ラインのリメイク(1997)はこの場面を借用したらしく、焼け跡に立つマクー氏とハンバートの後ろ姿が一瞬映し出される)、強風の中キャンパスを歩くクィルティ、湖でのシャーロット殺害未遂、早朝にホテルの各階の部屋を透視して見せる場面などは、映像として現実に見てみたいという欲望を喚起する。ナボコフは芸術のジャンルとしての映画を評価していなかったが一だからこそと言うべきか—映画、特にその視覚的効果に対する鋭敏な感覚は、多くの作品に残された映画の描写に表れている。

ニューヨーク公立図書館のバークコレクションが所蔵している『ロリータ』のシナリオの草稿は、出版された版の二倍ほどの分量がある。小説のために準備しながら実際には使わなかったと思われる部分も含まれており、シナリオとしての完成度は非常に低い、作家が小説『ロリータ』を書いている仕事場を覗き見るような面白さがある。出版された版も小説を読むためのヒントを含んでいる。たとえば小説以上に花が目立ち、中でも薔薇が様々な形で登場する。そのひとつである「ローズ夫妻」(この役名は台詞には出てこない)のようにシナリオを読む者にしか意味をもたない例を見ると、ナボコフ自身が意図的に小説読者のための「参考書」としての役割を出版用のシナリオに与えていたのではないかと考えざるをえない。

小説とシナリオを比較してみると、語り手である小説のハンバートと映画の登場人物としてのハンバートの違いがまず目につく。小説のハンバートが自己を弁護し、美化しているところで、シナリオのハンバートは露骨に見苦しい姿をさらしている。シナリオでは映画館という「お茶の間」向けに彼を小説以上に悪者に仕立てる必要があったことを割り引いても、小説のハンバートによる語りの疑わしさの度合いが見えてくる。シナリオのハン

バートは、ポオの少女愛についての講演中に興奮のあまり卒倒し、その後精神病院に入院する。小説では講演会の模様は省かれているし、精神異常の発作は鬱病ともとれるように曖昧に書かれている。対照的に、シナリオのロリータは小説よりも賢く、感情豊かな少女に描かれている。小説のハンバートが描くロリータは、彼らの関係が深まるにつれて、シャーロットが作った厳しい採点表に似てくる一短気、怠惰、反抗的、等々。それはハンバートがロリータの本当の姿や苦しみから（彼自身と読者の）目をそらした結果、見えたものである。自分の声で語る機会を与えられているシナリオのロリータは、終始読者の共感を得る存在になっている。

シナリオで幼いハンバートの母親が雷に打たれて死んだ直後、幽霊となって宙に浮かび、地上の父子にキスを投げる場面では、死んだ母親（たち）が死後も存在し、なにがしかの影響力を持っていることが暗示される。さらにシナリオでは、シャーロットとロリータがそれぞれにジャワ風の儀式的なジェスチャーでハンバートに椅子をすすめる。小説にはシャーロットのジャワ風挨拶は出てこないが、シナリオには、この母親の動作が再会時のロリータによってくり返されることがト書きとして書き込まれている。ロリータにおけるシャーロットの再現/再生が小説では目立たない形でくり返されるが、シナリオでは念入りに「註」の形で示される。

小説の「レイ Jr 博士」は前書きの著者としてのみ登場するが、シナリオの「レイ博士」はハンバートの主治医であり、狂言回しの役割を担っている。シナリオを読んでいると、初めのほうでしきりに現れるレイ博士の存在はむしろ邪魔であり、キューブリックがレイ博士を消してしまった（ピーター・セラーズ演じるクィルティの変装であるゼンフ博士を除いて）のは正しい処置であったと感じる。しかしながら、近年の『ロリータ』研究における成果のひとつとして「レイ」の重要性の発見があることを考えると、ナボコフがシナリオでレイ博士をことさらに目立たせていることも、「参考書」の重要な一項目であるように思われてくるのだ。

- i 若島正先生による新訳『ロリータ』が今月末に出版される予定である。旧訳からほぼ半世紀を隔てて、その間のナボコフ研究の成果を踏まえておられることは言うまでもないが、英語ロシア語両方の版をテキストとして差異を仔細に検討された点においても、画期的な翻訳である。
- ii キューブリックの映画はナボコフのシナリオにもとづいてはいるが、省略した部分や新たに加えられた部分が相当に含まれる。原作への忠実さをうたったラインのリメイクは、スティーヴン・シフのシナリオによっている。ナボコフのシナリオを完全に映画化した作品は存在しない。

## 研究会の報告（発表レジュメ）

### (1) 「イギリスにおけるゾラの受容」

異文化を取り込む行為としての翻訳は、その意図がどのようなものであれ、受け入れる側の文化との間に激しい摩擦を生じさせることがある。異文化受容の歴史にはこうした摩擦や衝突の例が多々見受けられるが、中でも19世紀末において自国のみならず他の国々でも反響を呼び、高い評価と同時に反発も生んだゾラ Emile Zola (1840-1902) の小説の翻訳は格好の研究対象となるだろう。

ゾラ作品は本国での出版からほどなく多くの国で翻訳されていたが、それが引き起こした反応は賛否相半ばするものであった。特に風紀問題に厳格なヴィクトリア朝のイギリスにおいては彼の作品に対する反発が強かった。ゾラ作品を精力的に出版していたヘンリー・ヴィゼッテリー Henry Vizetelly (1820-1894) と息子のアーネスト Ernest Alfred Vizetelly (1853-1922) は、1888年『大地』*La Terre* の英訳 *The Soil* を出版するにあたり、卑猥な表現と思われる部分を大幅に削除・修正したのであるが、残された箇所だけで充分に英国国民の怒りを煽り、National Vigilance Association の働きかけにより起訴された。最も反発を買ったのは、主人公ジャンが立会い、フランソワーズが牛の種づけをする箇所（第1章）である。この部分に関して仏語原文と比較してみれば、英訳は物語を忠実に追いながらも、既に表現を上品にぼかす作業を施していることが明らかなのだが、この様に修正を加えられた訳文に対してさえ猥褻さが問われたことを考えると、英国国民が性的な表現に対し特に敏感だったことがわかる。罰金刑を受けたヘンリーは修正を施した第二版を出版したが、再び起訴され、投獄されるに至った。

原作者のゾラではなく、その翻訳者・出版者がこれほど重い刑罰を受けたという事実は驚かされる。出版される前に検閲がなされ、問題の箇所が白抜きにされてしまう日本や、翻訳者自らがもはや改竄といえるほど徹底的に削除を行う米国ではあり得なかった事件だろう。この事例から、当時の翻訳者や出版者という職業が、異文化伝達の担い手として現代よりもはるかに重大な責任を持っていたことが窺えるのではないだろうか。翻訳者は原作に対する最初の検閲者であるとともに、翻訳の出版に際しては検閲を受ける立場でもあった。当時の翻訳者は自国の文化の「寛容」度を見極めた上で仕事をしなければならなかったのだ。実際、二度目の裁判の際に被告を裏切って不利な弁護をしたコック氏も証言しているとおり、ヴィゼッテリーは自国の文化への理解が足りず、削除を充分に行わなかったことで罪に問われたのである。同時代のゾラ作品の翻訳のうち、ヴィゼッテリー訳にはゾラ思想を忠実に伝えようとする意図が最も明瞭に伺われるのであるが、過度に社会を刺激しないための「自己検閲」作業と折り合いをつけるのは難事であったことだろう。19世紀末の英国におけるこの事例は進取の精神に富む翻訳者が直面するディレンマを浮き彫りにしていると言えるのではないだろうか。

(中村翠)

(2) 「フランスにおける極東詩の受容 -高踏派詩人と中国詩-

拙論「ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』における和歌翻訳について」(『人文知の新たな総合に向けて』第二回報告書Ⅳ〔文学篇1論文〕、2004年3月)では、19世紀半ばに始まったヨーロッパにおける和歌の翻訳のなかで、作家による翻訳として、また原歌の技法や歌意に関する細かい説明はそぎ落とし、和歌の詩形を模して5行詩に置き換えることを主眼にした翻訳として、当時においては異例の試みであったといえる『蜻蛉集』*Poèmes de la libellule* (1885) を取り上げ、「原典への非忠実性」という翻訳としての問題点が、翻訳の枠にとらわれない自立性をもった一作品を制作しようとする積極的な意向と表裏をなしていること、そして特に詩形の模倣という点において、翻訳から詩作にもつながる可能性をもつことを示した。

翻訳作業というだけでなく、創作的関心の延長上にもあったと考えられる『蜻蛉集』のこうした例は、さらに、ジュディット Judith Gautier (1845-1917) に先立つ作家らの「中国の詩」への関心を背景にしていたことをふまえることで、19世紀後期のフランス詩の側面を示す意味深い作品であったと理解される。中国詩は日本詩歌に先駆けてヨーロッパに紹介された。ジュディットが行った極東の詩への最初のアプローチも中国詩の翻訳『白玉詩書(原本表紙の表記より)』*Le Livre de Jade* (1867) であったが、この散文体による訳詩を、父のテオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier (1811-1872) は原詩の形式に倣って4行詩・7音節という韻文に訳し直してみせた。また、ジュディットと親交のあった詩人ヴィクトル・ユゴー Victor Hugo (1802-1885) にも同様に中国詩を模した作品がある。こうした中国詩のもつ新しい韻律を彼ら自身の詩に用いるという一種の「遊び」が、同じ極東の詩である和歌の翻訳でひとつの実りをみたのが『蜻蛉集』であったといえるだろう。

中国詩に対する関心は、ジュディットの周辺に集った詩人、言い換えれば、テオフィル・ゴーチエの影響を受けた高踏派詩人らの共通項でもあった。シュワルツ William Leonard Schwartz の著書 *The Imaginative Interpretation of the Far East in Modern French Literature 1800-1925* (1927) に紹介されているように、ゴーチエを始め、マラルメ Stéphane Mallarmé、ポプラン Claudius Popelin-Ducarre、クロ Charles Cros などの作品には、厳格な形式をもつ短詩である中国詩への興味がうかがえるほか、『蜻蛉集』と同じく極東詩の形式を模した翻訳はブレモン Emile Blémont やブーイエ Louis Bouilhet も行っている。極東詩の受容がフランス詩の動向、とりわけ短詩形の流行にいかなる影響を与えたかということが、20世紀に大きな反響を呼んだ「ハイカイ・フランセ」に関連付けて、クローデル Paul Claudel やボヌフォワ Yves Bonnefoy などにより考察されてきたが、高踏派詩人における中国詩の評価に始まり、極東詩の翻訳を経て、俳句の流行へとつながる連続した関心事としてとらえ直すことによって、フランスにおける極東詩の受容の意義はさらに浮き彫りにされるのではないかと思う。

(吉川順子)

(3) 「テキスト輪読:Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press, 1975.」範囲:第7歌第16連から第55連まで

第7章後半で最も興味深い部分は完成した作品にない第22連の異文「オネーギンのアルバム」のナボコフ註である。ナボコフは7ページもこの部分のコメンタリーに費やしている。「オネーギンのアルバム」のナボコフ註が暗示している問題は二つある。(1)この部分で現れるオネーギン像は何か(2)なぜナボコフはこの部分に異常な興味を示したか、である。

プーシキンの創造した世界では、ドライでニヒルなオネーギンの人物像の裏には、実は人生を深く考え、心を痛める繊細で情熱的な青年が隠されていたということが「オネーギンのアルバム」で明らかになる。この基本的矛盾について、小澤政雄氏は、第七章の半ばを制作中(1828年4月)、プーシキンの創作意識には二つの対立する傾向(歴史主義と反ロマン主義)が根底にあったと示唆している。異文「オネーギンのアルバム」はプーシキンが一時反ロマン主義に傾倒したことを表している(小澤政雄訳『エヴゲーニイ・オネーギン』群像社 p. 224-5)。アンチ・ロマン主義的『ポルタワ』や『スタンザス』の詩人であるプーシキンは、一方、バイロンを崇拜し、ロマン主義へ傾倒するオネーギンの作者でもあり、「オネーギンのアルバム」は移り変わる時代に抵抗する若いオネーギンの悩みを描いている。

*The Cambridge Companion to Nabokov* (Cambridge UP 2005, p. 2)の序文でジュリアン・コノリーは、ナボコフの“life as text”という思想に注目している。短編“Ultima Thule,”『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』、『青白い炎』でも life-text の同一性は主題となっている。「人生は作品なり」という考えの一つの解釈として、手記を書くことは「自分を書く」ことであり、「オネーギンのアルバム」という異文は作品全体の重要なテーマを照らし出しているのではないだろうか。プーシキンは最終的にこの異文の採用を断念したが、ニヒルなはずの主人公自身が意外に情熱的な心中を語るアルバムをタチアーナを通して読むことによって、私達のオネーギン像は大きく変わると同時に、プーシキンがオネーギンの人物形成に向けてここで飛躍を遂げたことが分かる。日誌というものは、それを書く「告白」という行為によって書く人の人生を変え、創り直していく。オネーギンは自らを日誌の余白に書き込む。語りという行為と語り手の生涯の深い関連をこの異文ははっきりと表現しており、ナボコフはこの問題に注目したのである。さすがナボコフらしい具体的且つ芸術論的注目点である。

また、日誌を読むことは「その人を読む」ことである。オネーギンという人間を書き込んだ日誌をタチアーナは読み、深く恋する。第23連には「くっきりと残った爪の痕」とあるが、当時本の余白に爪で書き込むという習慣があったのは印象深い事実である。インクと

ペンという道具に頼らず、色の無い爪あとで人目に触れることのない自分の秘密を、自分の肉体の一部を使って書き込むという行為は、最もプライベートな告白の形であろう。そのような秘密の告白をタチアーナは『オネーギンのアルバム』で読んでしまったのである。第7章後半には主だった出来事が起こらない。1830年3月22日に *Severnaya pchelа* に掲載されたブルガーリンの書評では、人気のあった第6章とは裏腹に、第7章を「単なる冗談だと思った」と酷評している。ナボコフのこの異文の解説なしでは、私達読者もブルガーリンのように第7章を内容の薄いものとして通り過ぎていたかもしれない。

(三浦笙子)

## お知らせ

◆第一研究班が、以下の要領で、第 18 回研究会を開きます。ご参加下さい。

日 時： 2005 年 11 月 19 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 220 号室

報 告： 中田晶子（南山短期大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 8 歌第 1 連から第 14 連まで」

◆国際シンポジウム「プーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』とナボコフによる英訳・注釈について」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

日 時： 2005 年 12 月 11 日（日） 午後 2 時より

場 所： 京大会館 101 号室

講 演： 川端香男里（東京大学名誉教授・川端康成記念館理事長）「ロシア文学作品の翻訳について—ナボコフの翻訳と注釈をめぐって」

Julian W. Connolly（ヴァージニア大学教授） “Vladimir Nabokov’ s Translation of Pushkin’ s *Eugene Onegin*”

## 後記：

木々の葉が日増しに色づいて参ります。あちらこちらで冬の足音も聞かれる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。早いもので、今年最後のニューズレターです。一方活動の方は、12月に国際シンポジウムを控えております。内外の著名な研究者お二人による講演を、我々も大変楽しみにしております。お一人でも多くの方に足を運んでいただければと思います。（皆尾）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：皆尾）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>

